赤人の「神岳に登りて作る歌」

岡本幸代

はじめに

『万葉集』巻第三にある「神岳に登りて、山部宿禰赤人が作る歌一首併せて短歌」（以下「神岳作歌」と記す）は、長歌と反歌より構成され、叙景部に対句を多用して、赤人らしい特徴が明瞭に表れた歌である。いわゆる「宮廷歌人」[1]とされる赤人の作であることと、歌の表現方法を考えると、行幸従駕歌でないにしても、何か公的な場で詠まれた作であるかもしれないと思われる歌である。しかし題詞や左注などに、制作年次や詳しい状況が記されておらず、作歌事情は全く不明である。したがって、多くの研究者が様々な角度から詳細な検討を加えている。清水克彦氏[2]は、「明日香の風光を称美することは、明日香そのものを讃えることであり、『いにしへ』を思って悲嘆することは、今の明日香の心を心とする」として、「神岳作歌」は赤人の明日香古京鎮魂歌であると考えている。太田豊明氏[3]は、「神岳に登りて詠んだ歌」という題詞に注目し、「神岳」で聖武新帝の即位に関する何らかの神事[4]が行われたのではないかと言う。そしてその神事は神亀元年春三月の吉野行幸の際に行われたとする。また、池原陽斉氏[5]は、「音のみし泣かゆ」という語句に注目し、「明日香の古き都」が「音のみし泣かゆ」の対象となりえるのは、その地にかつて住んだ人々、とりわけ、聖武天皇が範と仰いだ天武天皇の存在を意識するためではないかと結論づけている。このように「神岳作歌」について、先学の貴重な論考がなされている。しかし、「神岳作歌」において赤人が歌わなければならなかったものがあるとすれば、それが何であったのか、詳

細に検討した研究は少ないようである。この問題を、「神岳作歌」の表現からもう一度考え直してみることがこの小論の目的である。

神岳に登りて、山部宿禰赤人が作る歌一首併せて短歌

みもろの　神奈備山に　五百枝さし　しじに生ひたる
つがの木の　いや継ぎ継ぎに　玉葛　絶ゆることなく
ありつつも　止まず通はむ　明日香の　古き都は　山高
み　川とほしろし　春の日は　山し見が欲し　秋の夜は
川しさやけし　朝雲に　鶴は乱れ　夕霧に　かはづは騒
く　見るごとに　音のみし泣かゆ　古思へば　（3・三二四）

反歌

明日香川　川淀去らず　立つ霧の　思ひ過ぐべき　恋に
あらなくに　（3・三二五）

1

赤人の「神岳作歌」についてよく言及されることは、柿本人麻呂の「近江の荒れたる都を過る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌」（以後「近江荒都歌」と略す）に倣ったものであるという考察である。高松寿夫氏[6]は、赤人の「神岳作歌」には王権讃美を示す表現がほとんど含まれておらず、「王権不在」の表現になっているという。また、池原陽斉氏[7]は、天皇や大宮人を意識して当該歌の表現が編まれていることを、念頭に置くべきだとする。森斌氏[8]は、「神岳作歌」が人麻呂の近江荒都歌の影響にあり、過去と現在の対比が古を思い出させて、明日香の里が悲しみをつのらせるのだという。そこでまず、人麻呂の「近江荒都歌」を示し、その類似表現と相違点を検討してみたい。

近江の荒れたる都に過る時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

玉だすき　畝傍の山の　橿原の　聖の御代ゆ〈或は云ふ、「宮ゆ」〉　生れましし　神のことごと　つがの木の　いや継ぎ継ぎに　天の下　知らしめししを〈或は云ふ、「めしける」〉　天にみつ　大和を置きて　あをによし　奈良山を越え〈或は云ふ、「そらみつ　大和を置き　あをによし　奈良山越えて」〉　いかさまに　思ほしめせか〈或は云ふ、「思ほしけめか」〉　天離る　鄙にはあれど　石走る　近江の国の　楽浪の　大津の宮に　天の下　知らしめしけむ　天皇の　神の尊の　大宮は　ここと言へども　春草の　繁く生ひたる　霞立ち　春日の霧れる〈或は云ふ、「霞立ち　春日か霧れる　夏草か　繁くなりぬる」〉　ももしきの　大宮所　見れば悲しも〈或は云ふ、「見ればさぶしも」〉

（1・二九）

反歌

楽浪の　志賀の唐崎　幸くあれど　大宮人の　船待ちかねつ

（1・三〇）

楽浪の　志賀の〈一に云ふ、「比良の」〉大わだ　淀むとも　昔の人に　また　逢はめやも〈一に云ふ、「逢はむと思へや」〉

（1・三一）

まず初めに、赤人が人麻呂歌から想起したと思われる表現について考えてみよう。人麻呂の二九番と赤人の三二四番に共通する語は「つがの木の　いや継ぎ継ぎに」である。「つがの木」は「つ」の類音の「継ぎ継ぎに」を起こすための枕詞であるが、「継ぎ継ぎに」は「近江荒都歌」では、歴代の天皇がそこ（大和）で統治し続けていたことを表している。しかし赤人の「神岳作歌」の「継ぎ継ぎに」は、官人たちが絶えることなく明日香に通って来たい、あるいは来てほしいとの願望を表している。同じ表現が笠金村の「養老七年の吉野行幸歌」（6・九〇七）にもみられるが、金村の歌では、「三船の山にみづ枝さし　しじに生ひたる　とがの木の　いや継ぎ継ぎに　万代に　かくし知らさむ　み吉野の　秋津の宮は」と人麻呂と同じように離宮讃美・天皇讃美の表現と

なっている。同じ歌語を使い、継続していくことを表現していても、その主体は異なっているのである。では、「近江荒都歌」と「神岳作歌」が根本的に相違する点はどこにあるだろうか。

人麻呂の「近江荒都歌」では過去の天皇から詠い起こし、現人神である代々の天皇が、長い間ずっと大和に都を置かれていた事を述べる。それにもかかわらず、天智天皇が鄙である近江の国の大津宮に都を遷されたことに「いかさまに　思ほしめせか」と疑問を呈している。そして、その都が今は荒れ果て、春霞が立ち夏草が茂って大宮所が分からなくなっていることを悲しんでいる。人麻呂にとって近江大津の宮は、完全に過去のものとなっており、人麻呂の心に存在するものは喪失の悲しみだけであろう。人麻呂と同じく第二期の宮廷歌人と考えられる高市連黒人にも「近江の旧き堵を感傷して作る歌」がある。（ただ題詞の歌人名が「高市古人」となっているが、「或書に云ふはく、高市連黒人なりといふ」と注されている。）黒人の作品は短歌だけであるが、次のような歌である。

高市古人、近江の旧き堵を感傷して作る歌
或書に云はく、高市連黒人なりといふ

古の　人に我あれや　楽浪の　古き京を　見れば悲しき
（1・三二）

楽浪の　国つ御神の　うらさびて　荒れたる京　見れば悲しも
（1・三三）

高市連黒人が近江の旧き都の歌一首

かく故に　見じと言ふものを　楽浪の　旧き都を　見せつつもとな
（3・三〇五）

右の歌、或本に曰く、小弁の作なり、といふ。未だこの小弁といふ者を審らかにせず。

三二番歌、三三番歌とも作者名が古人となっていて問題ではあるが、諸注がこの二首を黒人の作と判断していることに、本稿は従う。人麻呂歌と同時期に詠まれたか、

人麻呂歌に倣ったものと考えてよいであろう。清水氏[9]は三二番の「さざなみの　国つ御神」という表現に「国つ御神」に対する鎮魂といった、呪術的思考の影がかなり濃厚に見いだされるという。「楽浪の」という地名は人麻呂歌と同じであり、三三番歌の結句は、人麻呂の長歌の末尾「見れば悲しも」と同じ「見れば悲しき」、「見れば悲しも」である。また三〇五番歌は、「見じと言ふものを・・・・見せつつもとな」と、古い都が荒れ果てている姿を見たくなかったと詠嘆している。人麻呂と黒人に共通する感情は、かつて繁栄していた旧都が失われ、荒れ果ててしまったことに対する挽歌的な思いであろう。しかし、清水氏は黒人歌に述べられた悲しみやよしなき心は、実は宮廷讃美の感情の変形とみるべきである、という。では、赤人の「神岳作歌」では旧都に対する思いがどのように表現されているだろうか。「神岳作歌」の冒頭に描かれているのは、昔と変わらない明日香の自然である。初句「みもろの」から第十一句「止まず通はむ」までは明日香に掛かるが、行幸従駕歌などに見られる国ぼめ[10]の表現である。太田豊明氏[11]は、「この歌は第一義的にはまず国讃め歌として理解されなければならない。」という。また旧都明日香の現在の景も、山と川、春と秋、朝と夜の対句表現を重ねながら生命力あふれる形で描かれる。ここまでの描写は、人麻呂や黒人の夏草や霞によってその所在もわからない「うらさびた」近江大津の宮とは、全く異なっている。赤人にとっての明日香は、「荒れ果て、うらさびた」旧都ではないのである。明日香の景は、そこに都のあった往時から赤人が神岳に登っている現在まで、変わらずに存在する。だが村山出氏[12]は、「明日香古京の自然が、このように美的構成的に表現されることによって、かえって不変であるべき古都が廃れて自然と化している現実を強く認識させ、古都を思慕する悲しみを喚び起こさずにいない」と考察する。たしかに人麻呂や黒人の近江荒都歌では、同じように生命力に溢れた春霞や夏草が荒れ寂れてしまった旧都を強く意識させるものであっただろう。しかし赤人が描こうとしたのは、明日香古京の望ましい現況であったのではないだろうか。赤人は、故京明日香を廃都として詠むことがはばかられたのではないかと考える。その理由につ

いては、後に述べることとする。

『万葉集』中にある「鶴」と「かはづ」はどのように歌われているのか見ていきたい。

2

まず「鶴」の歌を見てみたい。「鶴」または「葦鶴」などの詞が使われている歌は、『万葉集』中に長、短歌合わせて四十五首（「神岳作歌」を含む）存在する。またその早い時期のものは、第二期あたりからであろうと考えられ、第四期の大伴家持まで歌われ続けている。「鶴」の姿としては、「鳴く」というものが多く、約半数の二十首にのぼる。部立としては、雑歌、相聞歌、挽歌、羇旅歌などほぼ全部立に及ぶが、「神岳作歌」に詠まれた「乱れる鶴」という詞は他のどの歌にも出てこない。赤人の神亀元年の紀伊国行幸歌の反歌にも「鶴」が詠まれている。

神亀元年甲子の冬十月、紀伊国に幸せる時に、山部宿禰赤人が作る歌一首併せて短歌

やすみしし　わご大君の　常宮と　仕へ奉れる　雑賀野ゆ　そがひに見ゆる　沖つ島　清き渚に　風吹けば　白波騒き　潮干れば　玉藻刈りつつ　神代より　然そ貴き玉津島山　（6・九一七）

反歌二首

沖つ島　荒磯の玉藻　潮干満ち　い隠り行かば　思ほえむかも　（6・九一八）

若の浦に　潮満ち来れば　潟をなみ　葦辺をさして　鶴鳴き渡る　（6・九一九）

右、年月を記さず。ただし、玉津島に従駕すと偁ふ。因りて今行幸の年月を検し注して載せたり。

これは行幸従駕の歌であることが明らかであり、長歌

では和歌浦の景観の「清き渚」、「騒く白波」、「玉藻」などを詠んで、「然そ貴き」と国ぼめしている。反歌に「鶴鳴き渡る」と歌われた「鶴」は、潮の満ちて来た若の浦の景の一部となって動きと時間経過を感じさせ、行幸の地の繁栄を表すものであろう。また、「鳴き渡る」と詠まれることで、行幸の地で感じられる奈良の都への郷愁を含んでいるように思われる。

相聞歌や挽歌に詠まれた「鶴」は、「たづ」という音から「たづたづし」を引き出す序詞として、また「鳴く」姿から比喩として用いられることが多い。例えば「たづたづし」の場合は、「草香江の　入江にあさる　葦鶴の　あなたづたづし　友なしにして」（4・五七五）のような用い方である。また、鶴が鳴く声から「夕なぎにあさりする鶴　潮満てば　沖波高み　己が妻呼ぶ」（7・一一六五）などがある。このように鶴の鳴く声や姿に人の悲哀や恋心を重ねた歌は、「神岳作歌」の「鶴」と同じ心情を表現しているとは言えないと考える。従ってここからは相聞歌や挽歌ではなく、歌の景の一部として詠まれた「鶴」の歌について、検討していくことにしたい。

高市連黒人が羇旅の歌八首（中の二首）

桜田へ　鶴鳴き渡る　年魚市潟　潮干にけらし　鶴鳴き渡る　（3・二七一）

磯の崎　漕ぎ廻み行けば　近江の海　八十の湊に　鶴さはに鳴く　（3・二七三）

叙景的表現で、赤人に先立つといわれる万葉集第二期の歌人、高市黒人の歌であり、赤人の九一九番歌とよく比較されるものである。人麻呂と共に持統・文武朝に活動した「宮廷歌人」とみなされる黒人の歌であること、さらにこの時代の旅は、近代とは異なり個人的なものとは考えられず、官人の地方赴任や職業上のものであったと考えられるので、旅先の土地ぼめ的要素を含んでいるであろう。阿蘇瑞枝氏[13]は、黒人の羇旅歌は、旅中の景・風物にかかわる歌で、旅の心細さ辛さの感情を含んでい

るとする。阿蘇氏の言うように、この二首中の「鶴」の姿は眼前に迫るように描かれており、「鳴く」姿であるため、羇旅の歌という題詞のもとでは、旅先の景とともに旅の不安感、家への郷愁なども表していると思われる。

若湯座王の歌一首

葦辺には　鶴がね鳴きて　湊風　寒く吹くらむ　津乎の崎はも　（3・三五二）

作者の若湯座王については、伝未詳で『万葉集』中の歌はこの一首だけである。この歌は巻第三の雑歌の部に入っているが「津乎の崎はも」（所在未詳。『全集』）という詠嘆と「寒く吹くらむ」という推量の言葉から、旅先のことを思い出して詠んだ歌であろうと考えられる。作者が現在どこに居るのかははっきりしないが、都に戻って「津乎の崎」を回想しているのであろうか。回想の中で「鶴がね」は寒々しく響いており、「津乎の崎」の寂しげな景が見えるようである。次に巻第七雑歌にある歌について考えてみる。

摂津にして作る

難波潟　潮干に立ちて　見渡せば　淡路の島に　鶴渡る見ゆ　（7・一一六〇）

題詞からこれも羇旅の歌であると考えられる。鶴が、難波潟から飛び渡って行く景を描写したもので、鶴は作者のいる潟から飛び去って行くのである。淡路島へ渡ってゆく鶴は作者の視界から消えて行くのであり、旅先での寂しさや不安感、故郷への思いを内包していると思われる。ここに描かれた鶴の姿と共に表現されている景は、難波潟に満ちる活力を表しているとは言えないであろう。

ここまで叙景表現と思われる「鶴」の歌を五首（赤人の「紀伊国行幸歌」を含む）見てきたが、鶴の姿は「鳴いて飛ぶ」ことに重点が置かれていると考えられる。ところが、赤人の「神岳作歌」に描かれた「鶴」の姿は、

羇旅歌や相聞歌に描かれた「鶴」の姿とは異なっているように思われる。「神岳作歌」に詠まれた「鶴」は、明日香の山川という自然、春秋という季節、朝夕という時間のなか、明日香の景のもつ生命力を表すため「乱れ飛ぶ」姿として描かれているのではないだろうか。

次に「かはづは騒く」について考えてみたい。

「かはづ」の語が読み込まれた歌は、「神岳作歌」を含め『万葉集』中に二十首ある。そして興味深いことは、赤人と同時期の「宮廷歌人」、笠金村と車持千年の行幸歌に「かはづ」が詠まれていることである。二人の「かはづ」の歌は、時期は異なるがどちらも吉野離宮行幸時に作られたものである。作歌年次の古いものは千年の養老七年夏五月の作である。

車持朝臣千年が作る歌一首併せて短歌

うまこり　あやにともしく　鳴る神の　音のみ聞きし
み吉野の　真木立つ山ゆ　見下ろせば　川の瀬ごとに
明け来れば　朝霧立ち　夕されば　かはづ鳴くなへ　紐
解かぬ　旅にしあれば　我のみして　清き川原を　見ら
くし惜しも　（6・九一三）

反歌一首

滝の上の　三船の山は恐けど　思ひ忘るる　時も日もな
し　（6・九一四）

或本の反歌に曰く

千鳥鳴く　み吉野川の　川の音の　止む時なしに　思ほ
ゆる君　（6・九一五）

あかねさす　日並べなくに　我が恋は　吉野の川の霧に
立ちつつ　（6・九一六）

右、年月審らかならず。ただし、歌の類を以てこの次に載せたり。或本に云はく、養老七年五月に吉野の離宮に幸せる時の作、といふ。

笠金村の作品は、神亀二年夏五月の作である。

神亀二年乙丑の夏五月、吉野の離宮に幸せる時に、笠朝臣金村が作る歌一首併せて短歌

あしひきの　み山もさやに　落ち激つ　吉野の川の　川の瀬の　清きを見れば　上辺には　千鳥しば鳴く　下辺には　かはづつま呼ぶ　ももしきの　大宮人も　をちこちに　しじにしあれば　見るごとに　あやにともしみ　玉葛　絶ゆることなく　万代に　かくしもがもと　天地の　神をそ祈る　恐くあれども　（6・九二〇）

反歌二首

万代に　見とも飽かめや　み吉野の　激つ河内の　大宮所　（6・九二一）

皆人の　命も我がも　み吉野の　滝の常磐の　常ならぬかも　（6・九二二）

神亀二年の金村の歌での「かはづ」は、各注釈書[14]の現代語訳や解説[15]に見るように、吉野川の清らかさを表現し、賞美するための景物の一つとして詠まれていると考えられる。また、村山出氏は、九一三番の千年の吉野行幸従駕歌[16]について、「川の瀬ごとに　明け来れば　朝霧立ち　夕去れば　かはづ鳴くなへ」の表現が、「吉野川の瀬ごとの讃美するにふさわしい佳景を簡単に描いて」いるという。どちらの「かはづ」も吉野川の清らかさを表現し、国ぼめのための象徴的景物として詠まれていると捉えてよいだろう。そして千年の歌では、朝と夕との時間、川霧が歌われ、金村歌では「玉葛　絶ゆることなく」と「神岳作歌」と同じ表現が見られる。金村及び千年歌と赤人の「神岳作歌」におけるこの表現の類似から、作歌年次や事情について、清水克彦氏が興味深い考察をしている。初めに述べたように「神岳作歌」は制作年次や作歌事情の分からない歌である。清水氏は、赤人の「神岳作歌」が、笠金村歌および車持千年歌と多くの類似点を持つことを根拠に、吉野行幸のさいに詠まれたものであるとして次のように述べている。

赤人の作品は、養老七年五月の吉野行幸のさい、一行が往路明日香の神岳で潔斎の一夜を過ごした時、従駕していた赤人によって作られた、古京への儀礼歌ではないかというのが私見である。従って、赤人の作のほうが先であり、金村と千年は、先日神岳で作られた赤人の作品を共通の典拠として、分担作歌したものと見るのである。

（養老の吉野讃歌『万葉論集第二』）

しかし、金村・千年・赤人は同時代のいわゆる「宮廷歌人」と考えられる歌人たちである。彼等の作品が類似しているのは、彼らの先達である白鳳期の「宮廷歌人」、柿本人麻呂の表現に倣ったものだからではないだろうか。そう考える時、表現が類似していることがそのまま作歌年次の特定に結びつくとは言えないと思う。坂本信幸氏[17]は、清水氏の養老七年五月の吉野行幸時という考察に疑問を呈し、反歌の「明日香川　川淀去らず立つ霧の」という表現から、制作された季節を秋と考える。そして「金村、千年の吉野讃歌と、赤人の神岳の作に類似点が認められるとして、この作を金村、千年の吉野讃歌に近い時期に制作されたものと考えた場合、むしろ私は神亀元年秋をその制作時期と想定したい。」と述べている。また太田豊明氏[18]は、清水氏の「吉野行幸途次に詠まれたもの」という説を支持するが、ただその吉野行幸は、聖武天皇が即位したばかりの神亀元年三月の吉野行幸であろうとする。

このように「神岳作歌」の詠まれた時期や状況について考察することは、歌を理解する上で非常に有用であることは間違いない。しかし、いずれにしても詳細な題詞や左注を欠く「神岳作歌」において、作歌された年次や作歌の場・状況を決定することに関し、これまで以上の進展は望めないであろうと思われる。

「かはづ」の詠まれた「宮廷歌人」ではない歌人の歌を揚げてみよう。

上古麻呂が歌一首

今日もかも　明日香の川の　夕去らず　かはづ鳴く瀬の
さやけくあるらむ　（3・三五六）

（或本の歌、発句に云はく、「明日香川　今もかもとな」）

上古麻呂について、『万葉集歌人事典』（雄山閣）には、「河内国の上村主、山城国の上日佐の諸人の名が文献に残るが古麻呂との関係は未詳」とある。この歌も、藤原京、あるいは平城京に遷都したあと、古京明日香を懐かしんで詠んだものだと考えられる。都は変わっても、明日香という土地は忘れられない、特別な場所であったことが理解でき、「かはづ」はその景の象徴となっている。「神岳作歌」のなかの「鶴は乱れ」と「かはづは騒く」という表現は、明日香という土地が都であった時から今まで変わらず、清らかで生命力にあふれた特別な土地であることを象徴するものであるように思われる。つまり、「神岳作歌」に詠まれた「鶴」と「かはづ」は明日香の景を代表するものであり、明日香古京を讃美するものとなっていると言えるであろう。例えば、人麻呂の吉野行幸従駕歌（以後「吉野讃歌」と記す）（1・三六・三七・三八三九）では、吉野の山と川を「天の下に国はしも　さはにあれども　山川の　清き河内と」とか「たたなはる　青垣山　やまつみの奉る御調と　春へには　花かざしもち　秋立てば　黄葉かざせり」などと吉野離宮の地を讃美した表現が見られる。また、笠金村の「養老七年の吉野離宮行幸歌」（6・九〇七）にも「み吉野の　秋津の宮は　神からか　貴くあるらむ　国からか　見が欲しからむ　山川を　清みさやけみ」詠んでいる。同じように「神岳作歌」の初句「三諸の」から「朝雲に　鶴は乱れ　夕霧に　かはづは騒く」までは、太田氏[19]が言うように国ぼめ的表現であると考えてよいであろう。このような「神岳作歌」に見られる表現方法は、赤人の新しい発想だと言えるのではないだろうか。

これまで「神岳作歌」について見てきたように、第一句から「かはづは騒く」までは古京明日香の景がかわらず存在することが、整った対句表現で褒めたたえられていた。ところが、結句三句で突然、「見るごとに　音のみし泣かゆ　古思へば」という心情が歌われて、第二十二句までの国ぼめ的表現との隔たりが大きい。なぜ赤人はこのような表現をしたのだろうか。その理由を考

察するために、万葉集中に認められる「音…泣く」と「古思へば」という歌語のある歌を検討してみたい。

3

「音のみ泣く」、「音のみし泣かゆ」あるいは「音をのみ泣く」など「音…泣く」という歌語を使用した歌は、『万葉集』中に三十一首[20]存在する。作歌された年代を見ると、最も初期のものは額田王の「山科の御陵より退り散くる時に作る歌」[21]であり、時代を問わず詠まれ、第四期の大伴家持や池主まで歌い続けられている。そのほとんどが、相聞歌と挽歌である。挽歌には高橋虫麻呂の菟原処女や葦屋の処女を詠った伝説歌のようなものもある。また山上憶良の「老いたる身に病を重ね、年を経て辛苦み、また子等を思ふ歌」（5・八九七）のような歌もあるが、どれも人間を対象として歌われていると考えられる。

赤人と同じ「宮廷歌人」である笠金村の歌を考えてみたい。

霊亀元年、歳次乙卯の秋九月に、志貴親王の薨ずる時に作る歌一首幷せて短歌

梓弓　手に取り持ちて　ますらをの　さつ矢手挟み　立ち向かふ　高円山に　春野焼く　野火と見るまでに　燃ゆる火を　何かと問へば　玉鉾の　道来る人の　泣く涙　小雨に降れば　白たへの　衣ひづちて　立ち留まり　我に語らく　なにしかも　もとなとぶらふ　聞けば　音のみし泣かゆ　語れば　心そ痛き　天皇の　神の皇子の　出でましの　手火の光そ　そこば照りたる

（2・二三〇）

短歌二首

高円の　野辺の秋萩　いたづらに　咲きか散るらむ　見る人なしに

（2・二三一）

三笠山　野辺行く道は　こきだくも　繁く荒れたるか

久にあらなくに　（2・二三二）

右の歌は、笠朝臣金村が歌集に出でたり。

或本の歌に曰く

高円の　野辺の秋萩　な散りそね　君が形見と　見つつ偲はむ　（2・二三三）

三笠山　野辺ゆ行く道　こきだくも　荒れにけるかも久にあらなくに　（2・二三四）

左注に「笠金村の歌集に出でたり。」とあり、金村作として誤らない歌で、金村の代表的作品とする研究者も多い。歌の構成は、志貴親王の薨を知らない通りすがりの私が、「野火と見るまでに　燃ゆる火を　何かと問へば」、道を来た人が泣きながら「天皇の　神の皇子の出でましの　手火の光」だと話して聞かせるというものである。ここで「音のみし泣く」のは道を来る人（皇子に仕えている官人）であり、泣くのは志貴親王の為である。「音のみ・・・泣く」対象は明確であり、一人の人間である。

聖武朝の左大臣となり、一時期は政治を動かした長屋王にも、「音・・・泣く」という詞のある相聞歌がある

長屋王、馬を奈良山に駐めて作る歌二首

佐保過ぎて　奈良の手向けに　置く幣は　妹を目離れず相見しめとそ　（3・三〇〇）

岩が根の　こごしき山を　越えかねて　音には泣くとも色に出でめやも　（3・三〇一）

三〇一番歌の「音には泣くとも」の直接的な原因は、岩がごつごつして険しい山路に難儀をして泣く、ということである。しかし根底にあるのは妻への思慕の情であり、【全集】は「古代人は旅行中険路で難渋すると、自身に隠し事があって道の神から咎められているのだと考えることがあった。ここもその俗信と関係があろう」と

する。『集成』では、「公用の旅の途中で女々しい態度は見せたくないとの気持ちを歌ったもの」と解説している。三〇〇番歌と三〇一番歌が同時の作と考えるならば、「音には泣くとも　色に出でめやも」は妻への思慕が詠まれているとして間違いはなさそうである。

この他、東歌や作者未詳の作品にも「音…泣く」という表現は使われている。つまり『万葉集』において「音…泣く」という表現は、これまで言われているように、人間を対象とした常套句と考えてよいと思われ、「神岳作歌」に詠まれた古京明日香の景というような自然が、心を動かす原因としてうたわれた歌は見当たらなかった。ただ、巻二十に、次のような歌が存在する。

藤原夫人の歌一首、浄御原宮に天の下治めたまひし天皇の夫人なり。字は氷上大刀自といふ

朝夕に　音のみし泣けば　焼き大刀の　利心も我は　思ひかねつも　（20・四四七九）

恐きや　天の御門を　かけつれば　音のみし泣かゆ　朝夕にして　（作者未詳なり）　（20・四四八〇）

右の件の四首（四四七七～四四八〇　稿者注）、伝へ読むは兵部大丞大原今城なり。

『全集』にある四四七九番の注には、「この歌は、この年（天平勝宝八年　稿者注）より七十五年以前の作で、作歌事情も、また恋の歌か挽歌なのかも不明。大原今城がこの歌を伝誦したのは、藤原夫人―但馬皇女―穂積皇子―坂上郎女という経路を通じてのことか」とある。また四四八〇番には「この歌は作歌事情のみならず作者も不明であるため、どの天皇をさして言ったか分からない」と解説している。どちらの歌も「音…泣く」対象あるいは原因が明確ではなく、特に四四八〇番の「天の御門」をどう解釈するかが問題となる。『全集』は「天皇の宮殿をいうが、転じて天皇、それも特に先帝を敬避してさすことが多い。」とする。『新大系』も「天皇のこと」と『全集』と同じ解釈をする。中西進氏[2]は「朝廷のこと」と説明し、「恐れ多いことよ。朝廷のことを心にかける

と、泣かれてしまう、朝も夕も」と訳している。『集成』は「恐れ多い天の御門、わが大君のその御門が心にかかって離れないで、やたらと泣けてくる、朝にも夕にも」とする。中西氏や『集成』の解釈に従えば、「音のみし泣かゆ」の対象は「朝廷」または「大君の御門」で、人以外のものに使用されていることとなり、旧都に対する「神岳作歌」と通じる表現と考えられる。しかし、『新大系』や『全集』は「天の御門」を天皇としており、四四八〇番の解釈は注釈書によって異なり、まだ定説といえるものは認められないと考えられる。ここまで『万葉集』の表現を見てきたが、相聞歌や挽歌における常套句的な「音…泣く」という詞を、旧都にたいする心情表現に使用したことは、赤人の新しい発想、独創性であると言えるのではないだろうか。次に、「古思へば」について検討を加えたい。

4

「神岳作歌」には「明日香の　古き都は」と場所が提示された後、その旧都は「山と川」、「春と秋」、「朝と夕」の対句で讃美されているが、「見るごとに　音のみし泣かゆ　古思へば」と赤人の心を強く動かす「古」とはいつのことであろうか。その「古」を探る前に、明日香という都は、赤人たち聖武朝の人々にとって、どのような場所であったのかを考える必要があると思われる。そこで、まず「明日香」が詠まれた歌を考察してみたい。「明日香」が人名や枕詞のように使用されている歌は取り上げない。

和同三年庚戌の春二月、藤原宮より寧楽宮に遷る時に、御輿を長屋の原に停め古郷を廻望みて作らす歌

一書に云はく、太上天皇の御製

飛ぶ鳥の　明日香の里を　置きて去なば　君があたりは見えずかもあらむ（一に云ふ、「君があたりを　見ずてかもあらむ」）　（1・七八）

題詞によれば、平城京遷都の時の歌ということになる

が、「一書に云はく、太上天皇の御製」という但し書きが問題となるところであろう。『新大系』は、この時、太上天皇と呼ばれる天皇はいないので、元明天皇が太上天皇となられた後の注記かもしれないとしている。『全集』や『集成』など他の注釈書では、本文と異文とを区別して考え、太上天皇を持統とする。『集成』は「もと藤原遷都の時の御製だが、明日香・藤原宮時代を偲ぶ歌の一つとして、奈良遷都途上の儀礼の場で歌われたもの。異文の方が持統御製の姿である。」とする。首肯できる解釈であろう。伊藤博氏[23]は、長屋の原で旧都への手向けの礼が行われたとし、『集成』では土地讃めの意を認めている。確かに遷都をする際には旧都への手向けをする必要があったであろう。しかし、壬申の乱で荒廃した近江大津宮を除いて、旧都に対する惜別の思いを表現した歌はこの時までは歌われなかった。明日香という都が特別な所であったということが言えるのではないだろうか。

明日香宮より藤原京に遷居りし後に、志貴皇子の作らす歌

采女の　袖吹き返す　明日香風　京を遠み　いたづらに吹く　（1・五一）

題詞に、藤原京に遷都した後の志貴皇子の歌とある。「采女の袖」は都にだけ存在する美を象徴するものであろう。その袖が風に翻っているという景は、都の雅を表現するものである。今、明日香に吹く風は采女の美しい袖を揺らすことができない。遷都によって都ではなくなり、采女たちがいなくなってしまったからである。故に、明日香の風も今は無駄に虚しく吹いている、というのである。旧都となってしまった明日香に対する残念な気持ちや寂しさが、「いたづらに吹く」という歌語に表現にされていると思われる。

持統朝の柿本人麻呂が『万葉集』に見えなくなってからほぼ三十年、聖武朝に金村、千年、赤人が、「宮廷歌人」として突然登場してきた背景には、左大臣長屋王の存在

があるとの説[24]がある。その長屋王にも明日香を詠んだ歌が存在する。

長屋王の故郷の歌一首

我が背子が　古家の里の　明日香には　千鳥鳴くなり
夫待ちかねて　（3・二六八）

右、今案ふるに、明日香より藤原宮に遷る後に、この歌を造るか。

左注に七八番歌と同じく藤原宮遷都後に作られた歌であるか、とされるが、第五句には異論がある。『全集』では「夫待ちかねて」、『新大系』では「妻待ちかねて」、中西進氏[25]は「嶋待ちかねて」としている。長屋王の作でありながら、初句が「我が背子が」とあること、第五句の原文は「「嶋待不得而」とあるが、歌意が通りにくいことから『夫木和歌抄』にある誤字説をとり、「夫あるいは妻」としている注釈書[26]が多い。しかし、比喩として歌われていても、待ちかねて鳴いているのは一応千鳥であるから、作者が男性の長屋王であっても、千鳥は雄雌どちらでも問題はないであろう。「嶋」という解釈をする中西氏は、長屋王の妃吉備内親王の父が草壁皇子であることを考慮して、原文通りとしたのであろう。草壁皇子の邸宅が島の宮と呼ばれていたためであり、「我が背子」は草壁皇子であるとする。この小論では「嶋」の字の正誤を問うことはしない。どちらであっても、明日香は「古家の里」と表現され、「千鳥が夫または妻を待っている」場所なのである。

第3節で述べた上古麻呂の歌も明日香を懐かしんだ歌に分類されるであろう。制作年次や状況は不明であるが、『集成』は奈良遷都の後、明日香の故郷を思いやって作った歌か、と注している。初句「今日もかも」と結句の「さやけくあるらむ」に、故郷明日香に対する心情が明確に表現されていよう。或本の歌では「もとな」に旧都であった頃を懐かしみ、今の変化を残念に思う気持ちが表現されていると考える。

次に、巻第十九の「古き都の歌なり」という左注のある歌を見てみたい。

十月二十二日に、左大弁紀飯麻呂の家にして宴する歌三首（中の一首）

明日香川　川門を清み　後れ居て　恋ふれば都　いや遠そきぬ　（19・四二五八）

右の一首、左中弁中臣朝臣清麻呂の伝誦する古き都の歌なり。

『全集』では「川門を清み　後れ居て」に「旧都の自然に心が引かれ、離れがたくて」と注をつけている。聖武朝の官人等にとって、明日香は特別な意味を持つ土地であったのではないだろうか。

七八番から四二五八番まで四首の短歌をみてきたが、そこに読み取れるのは故郷明日への特別な心情であろう。天武天皇によって明日香浄御原に宮が置かれるまで、代々天皇が変わる度に、その宮地も遷されていた。しかし天武天皇薨去後も、中国に倣った新しい都、藤原京が完成し遷都するまでの八年間、持統天皇は都を遷していない。その後も平城京に遷都するまで持統、文武、元明天皇は藤原京を都としている。しかし、平城京で即位した聖武天皇に仕える人々の心中に、明日香古京への特別な想いが生まれた理由は、何なのであろうか。それは、明日香が天武天皇の都であったことが最も大きな理由であると考えられる。聖武天皇は、中継ぎの女帝二人をはさみ、天武皇統として待ち望まれた男子の天皇であり、天武天皇への尊崇の気持ちを強く持っていたと考えられている。鉄野昌弘氏が、「奈良朝の官人には、天武皇統と自分たちの原点として、明日香を顧みる精神が確かにあった」と述べている（山部赤人「登神岳作歌」試論）ように、聖武を取り囲む人々は、皆同じように天武・持統朝への憧れや懐旧の想いを抱いていたであろう。それこそが、明日香故京を懐かしむ特別な感情を引き起こす理由であったと思われる。

これまでの明日香という古京がもつ意味を考えてきたが、ここから赤人のいう「古思ふ」について考えていきたい。文武天皇が軽皇子であった時に柿本人麻呂の作った歌「軽皇子、安騎の野に宿らせる時に作る歌（以後「阿

騎野の歌」と記す）」の長、短歌のなかに「古思ふ」という叙述がある。

軽皇子、安騎の野に宿らせる時に、柿本朝臣人麻呂が作る歌

やすみしし　我が大君　高照らす　日の皇子　神ながら
神さびせすと　太敷かす　京を置きて　こもりくの　泊
瀬の山は　真木立つ　荒き山道を　岩が根　禁樹押しな
べ　坂鳥の　朝越えまして　玉かぎる　夕さり来れば
み雪降る　安騎の大野に　はたすすき　篠を押しなべ
草枕　旅宿りせす　古思ひて　（1・四五）

短歌

安騎の野に　宿る旅人　うちなびき　眠も寝らめやも
古思ふに　（1・四六）

ま草刈る　荒野にはあれど　もみち葉の　過ぎにし君の
形見とそ来し　（1・四七）

東の　野にかぎろひの　立つ見えて　かへり見すれば
月傾きぬ　（1・四八）

日並の　皇子の尊の　馬並めて　み狩立たしし　時は来
向かふ　（1・四九）

軽皇子（文武天皇）は、天武天皇の皇太子であった草壁皇子の皇子で、聖武の父である。草壁は、天武と菟野讃良皇女（持統天皇）の皇子であり、天武皇統として即位が期待されていたが、夭折された。その時、軽皇子はまだ幼く皇位に就くに耐えなかったため、天武の皇后であった持統が即位したのである。この人麻呂の「阿騎野の歌」は、軽皇子が安騎の野で遊猟をする姿と父草壁皇子の姿とを重ねている。長歌の「古思ひて」に『全集』は「日並皇子がここに来られた時のことを偲んで」と現代語訳をつけている。他の注釈書でも、草壁皇子がかつて遊猟した地である安騎の野での軽皇子の父追慕を詠ん

だ歌と注記している。四九番の「日並の皇子の尊」という叙述に草壁皇子の姿ははっきりと表れ、「み狩立たし　時は来向かふ」で、草壁皇子の姿に軽皇子の姿が二重写しとなる。前述したように、軽皇子（文武天皇）は首皇子（聖武天皇）の父である。ここで注意されることは、軽皇子と首皇子の皇位継承は非常に似た状況にあったことである。首皇子の父である文武天皇も草壁皇子と同じように二十五才で夭折されている。（草壁皇子は即位せず亡くなり、軽皇子は文武天皇として即位したという違いはあるが。）この時首皇子は六～七歳で幼く、即位することはできなかった。そこで草壁の妃であった阿閉皇女が元明天皇として即位し、その後草壁と元明の女であった氷高皇女が元正天皇となる。二人の女帝を中継ぎとして、首皇子は聖武天皇として即位したのである。文武と聖武、二人の天皇は、天武皇統を守り継続するために、周到な準備期間を経て即位できたのである。

次に巻第十三の雑歌を考えてみたい。

幣帛を　奈良より出でて　水蓼　穂積に至り　鳥網張る
坂手を過ぎ　石橋の　神奈備山に　朝宮に　仕へ奉りて
吉野へと　入ります見れば　古思ほゆ

（13・三二三〇）

反歌

月も日も　変はらひぬとも　久に経る　三諸の山の　離宮所

（13・三二三一）

右の二首、ただし、或本の歌に曰く、「旧き都の離宮所」といふ。

吉野離宮へ向かう道行文型の歌である。第八句から第十句に「神奈備山に　朝宮に　仕え奉りて」とあって、吉野へ向かう途中、神奈備山で一夜過ごしたことが考えられる。「神奈備山」だけではどの山を指すか明確ではないが、反歌に「三諸の山」とあることを考慮すれば、「神岳」を一候補とすることも否定できないであろう。結句の「古思ほゆ」について、『全集』、『新大系』、『集成』

など多くの注釈書が、「明日香に都し、吉野にゆかりのあった天武・持統の両天皇を主に指して言った」としている。人麻呂の「安騎野の歌」および三三三〇番歌の「古思ふ」を見てきて、「神岳作歌」の「古思へば」に込めた赤人の心情が読み取れるのではないだろうか。聖武朝の「宮廷歌人」である赤人の意識した「古」は、聖武天皇の心中を代弁したものであったはずである。前にも触れたように、聖武天皇は天武皇統の男子として、二代の女帝を挟んで待たれた天皇である。天武天皇尊崇の意識はとても強いと考えられる。その待ち望まれた男子の聖武が即位して間もない時期に「神岳作歌」は作られたのではないかと考える。とすれば「神岳作歌」にうたわれた「古」は、明日香浄御原に天武・持統天皇の都が置かれていた時代と考えて大きな間違いはないであろう。「神岳作歌」の長歌について考察を加えてきたが、反歌についても、さまざまな議論が加えられている。

5

反歌において問題となるのは、長歌に詠まれた主題とは大きく異なった「思ひ過ぐべき　恋にあらなくに」という相聞的表現である。この叙述について、『新大系』は「恋は、明日香旧都に対する懐旧恋慕の情」とし、『集成』は「明日香旧都への慕情の激しさをこのように言ったもの」と解説している。中西進氏は、『講談社文庫　万葉集　全訳注原文付』で「旧都への恋」と注している。森斌氏[27]も「『古思ほゆ』と言う心情を『恋』という言葉で表現した」と述べる。しかし『全集』は、「思ひ過ぐべき恋」について「思ヒ過グは思いが消える、思わなくなる、の意。この恋は家人を思う情」と解する。梶川信行氏[28]も、『全集』と同様に「人に対する情である」という解釈を示している。梶川氏は、人麻呂や金村、赤人など、「宮廷歌人」と呼ばれる歌人たちには二つの作品系列が存在するという。その一つが〈儀礼的な作品〉であり、もう一つは〈遊興的な作品〉であるとする。「神岳作歌」はその〈遊興的な作品〉の類の歌であるとし、

赤人が長歌で「止まず通はむ」というのは「恋」のためであり、「音のみし泣かゆ」というのもその「恋」のゆえであろうと述べる。「神岳作歌」は宴席などの場でうたわれ、そこに出席している官人たちを楽しませるために、赤人が創作した歌物語であるとするのである。この問題を解決するために、『万葉集』中に人間ではない自然や故郷に対して「恋」と表現した歌が見られるかどうか、分析してみたい。

巻第七は、巻第六までの配列では整然と分類できないような作品を収集配列した巻である。作者未詳で、作られた年代も明確ではない作品を、巻第三と同じように雑歌・比喩歌・挽歌に分けている。その雑歌をさらに「何を詠む」、「吉野にして作る」「摂津にして作る」、「羇旅にして作る」のように題材や媒材による類聚方式をとって、題詞を設けている。「吉野にして作る」、「山背にして作る」、「摂津にして作る」という土地名の題詞のある歌が合わせて三十一首、「羇旅にして作る」という題詞の歌が九十首存在する。その百二十一首の歌の中に「恋」という詞が使われている歌が十三首ある。そのうち「摂津にして作る」歌にある「恋」という語を含む二首はどちらも「恋忘れ貝」という名詞であり、また「羇旅にして作る」歌の中の一首も「恋忘れ貝」という名詞であるため考察の対象とはしない。従って残る十首について見てみると、雑歌の部立に分類されながら相聞歌と考えられる歌が四首存在するが、残りの六首は故郷や旅先の土地を対象としていると考えられる。その六首について検討していく。

「羇旅にして作る」歌五首のなかにある一首は、訪れた場所が明確には示されていない。

我が船の　梶はな引きそ　大和より　恋ひ来し心　いまだ飽かなくに　（7・一二二二）

すでに述べたように巻第七は、作者未詳で作歌年次も不明な歌を集めた巻であるが、この歌には、作者をある程度推測できるような左注が存在する。この一二二一番は、一二一八番から一二二二番と一一九四番、一一九五

番の七首でひとまとまりと考えられている。というのは、巻第七には、途中乱丁による歌順の混乱があり、この歌の順序も乱れているとみなされているのである。『全集』や『新大系』、『集成』は一一九五番の左注にある七首を、この一二二一番を含んだ七首とし、一一九五番歌の左注に、「右の七首は、藤原卿の作なり。未だ年月を審らかにせず。」とある。さらに『全集』、『新大系』は、この七首の作者を「一般に藤原房前かとする」と説明し、作歌時期を[29]「神亀元年紀伊国行幸の際」とする説をあげる。この小論では作者を正確に特定することを目的とはしていないので、『全集』や『新大系』の理解に従っておく。とすれば、この歌は赤人と同時代に詠まれた歌ということがいえるであろう。歌の内容は、「大和からはるばるとこの景色にあこがれて来た。でも心が十分満たされていないから、まだ船を漕ぎ出さないでおくれ」と船頭に頼んでいるということになるだろう。「恋ひ来」たのはその場の景色を見るためということになり、人に対する「恋のため」ではない。

次に、茨城県鹿島郡の南端、波崎町（『新大系　萬葉集索引』）にある鹿島の崎を詠んだもの。

霰降り　鹿島の崎を　波高み　過ぎてや行かむ　恋しきものを　（7・一一七四）

「霰降り」は地名「鹿島」の枕詞で、現代語訳すれば「鹿島の崎をぜひ見たいのに、波が高いので素通りするのか。残念なことだ」ということになるだろう。『新大系』では、「名に聞こえた地を見ないで行くことの残り惜しいという舟行の情が歌われている（『全注釈』）」と注している。この歌も作者と作歌時期は分からないが、人ではなく風景を「恋」の対象としているといってよいと思われる。

次に大和から旅立つ心を詠んだもの。

朝霞　止まずたなびく　竜田山　船出しなむ日　我恋ひむかも　（7・一一八一）

朝霞がいつもたなびいているその竜田山を、船出する日には、私は恋しく思うだろうという歌で、故郷に対す

る「恋」を詠んだものだと考えられる。伊藤博氏の『角川文庫本　万葉集　現代語訳付き』の解説では「難波から船出する日」としているが、「竜田の山をさぞかし恋しく思うことであろう」と訳しているので、やはり「恋」の対象は「竜田山」である。『新大系』の注でも「難波で船出を待っている時の作であろう。」とする。『集成』では竜田山について、「大和と難波を結ぶ竜田道沿いの山。家郷大和を偲ぶよすがの山であった。」と注記している。故郷大和に対する「恋」を詠んでいると考えてまちがいないであろう。

次の二首は、行幸先で詠まれたもので、行幸の地に対する特別の情が含まれていることも考慮しなければならないだろう。

家にして　我は恋ひなむ　印南野の　浅茅が上に　照りし月夜を　（7・一一七九）

『全集』は「月を見た翌朝から家に帰り着くまでの間に詠まれたもの。神亀三年（七二六）の印南野の行幸の時の作か。」と注している。「恋ひなむ」直接的対象は「照りし月夜」であるが、「月」を通してその「月夜」を体験した「印南野」を土地ほめしているのではないだろうか。「印南野の　浅茅が上に　照りし月夜」という詞を通して、印南野という行幸地が特別な清浄感を持っていることを表現しているのであろう。

玉津島　見てしも良けく　我はなし　都に行きて　恋ひまく思へば　（7・一二一七）

「玉津島　見てしも良けく　我はなし」と否定形で歌われているため、少し理解しにくい歌である。『全集』は「玉津島を見てもいい気持ちに、わたしはなれない。都に行って恋しくなるだろうと思うと」と現代語訳して、「玉津島の風光を讃美しながら、ことさらに裏返しに表現した点に新味がある。」とする。『新大系』は、「旅先にあって、『都に行きて』と『行く』の語を用いている。」と解説している。旅先の玉津島に対する讃美の情を、否定形で歌うことによって強く表現していると考えて良

い。

次に、雑歌「吉野にして作る歌」の中にある「恋」という詞のある一首。

吉野にして作る

皆人の　恋ふるみ吉野　今日見れば　うべも恋ひけり
山川清み　（7・一一三一）

伊藤博氏[30]は「大宮人の誰もかれもが恋い焦がれているみ吉野、その吉野を今日訪ねてみると、なるほど恋い焦がれるのももっともなことだ。山も川も清らかなのだから。」と訳している。大宮人にとって、吉野という場所が特別な地であることが、この歌から理解できるのではないだろうか。

巻第九は、雑歌、相聞、挽歌の三大部立が揃う唯一の巻であり、年代を追った配列が意識されている。その雑歌の中に吉野を詠んだ歌が収録されており、その中に「恋」という詞が見られる。

元仁の歌三首（中の一首）

吉野川　川波高み　滝の浦を　見ずかなりなむ　恋しけまくに
（9・一七二二）

元仁[31]については、どの注釈書も作者未詳としている。三首ある歌は、すべて吉野を詠んだものであり、歌の配列位置は春日蔵首老の歌と島足の歌の間である。島足も不明であるが、その五首後ろに宇合卿の歌があるので、年代的には、赤人と同じ頃と考えても大きくは誤らないと思われる。この歌で「恋しけまく」思うのは、吉野川の「滝の浦」である。第4節の「古思へば」で取り上げた「中臣朝臣清麻呂の伝誦する古き都の歌」でも、「恋ふれば都　いや遠そきぬ」と詠まれている。

ここまで、作者や作歌年次は明確でないにしても、赤人の作歌時期から大きく外れないと思われ、「恋」の対象が人ではないと思われる「恋」という詞の使われている歌を七首みてきた。これらの結果から、「恋」という語は、人に対してのみ用いられるものではないというこ

とが明白になったのではないだろうか。「神岳作歌」の反歌に用いられた「恋にあらなくに」の「恋」の対象は、これまで多くの研究者が結論づけているように、明日香旧都と考えてよいと思う。梶川氏の考察は、新しい見解を提示しているが、長歌と反歌は一体をなすものと考えなければならないはずである。長歌の国ほめ的表現から一転して、反歌では明日香古京における恋人への慕情を歌うとすれば、この歌で赤人が表現しようとしたものを理解することが難しくなるのではないだろうか。赤人は聖武朝の「宮廷歌人」として、天武天皇の都であった明日香を、荒れ果て寂れた旧都として悲しむことはできなかったのではないかと考える。旧都となっても、天武天皇の都であった頃と変わらず生命力に満ち、「思ひすぐべき　恋ひにあらなくに」と詠むことが求められたのではないだろうか。

まとめ

山部赤人の「神岳作歌」には作歌年次も作歌状況も書かれていないため、赤人の作歌意図を理解することが難しく、歌の表現についてさまざまな考察がなされてきた。小稿においては、赤人の歌、特に長歌について考える場合、聖武朝に生きた「宮廷歌人」であるということを考慮せずに論じることはできないという論点から考察してきた。また「神岳作歌」が長歌と反歌を併せ持ち、公的な場で詠まれるような形式を備えている点も、この歌を理解する上で重要ではないかと思う。つまり、公的な作品としての体裁を備えているのであり、「神岳作歌」が行幸の途次に成されたものであるという先行研究の考察には大きく首肯するところである。ただ、行幸もしくはそれに近い場面で作歌されたのであろうとするのが、本稿の「神岳作歌」についての理解である。その理由は、赤人が個人的に神の山である「三諸の神奈備山に登」る状況は考えにくいのではないかと思うからである。そのような場面・状況で、赤人は旧都明日香を「山高み　川とほしろし」と讃美し、さらに春と秋という季節や朝と夕という時間、鶴とかはづという景物を、対句で生き生きと描き出す。同じように旧都を詠んだ人麻呂や黒人の

歌では、近江大津宮は春霞や夏草に覆われて荒れ果てた旧京とうたわれ、「見れば悲しも」と悲傷されるのである。しかし、もう二度と都となることはないであろう旧都明日香に対する赤人の心情は、「見るごとに　音のみし泣かゆ　古思へば」と表現されている。第4節で、人麻呂や志貴皇子など六首の歌から考察したように、赤人が想い起こす「古」は、天武・持統天皇によって明日香浄御原に都が置かれていた時代である。その明日香は、現在も昔と変わらず「山高み　かわらずとほしろし」であり、「春の日は　山し見が欲し　秋の夜は　川しさやけし　朝雲に鶴は乱れ　夕霧に　かはづは騒く」とうたわれる。都が置かれていた頃と変わらない「古」の栄華を思い起こさせる景なのである。季節や時は流れ、都は遷っても、天皇の御代は変わらず続いて行く。赤人が旧都明日香をこのように表現した、あるいはしなければならなかった理由は、明日香が天武天皇の都であったことであろう。第4節で述べたように、聖武は、天武皇統として久しく待ち望まれ、元明・元正という二人の中継ぎの女帝を挟んで即位した男子の天皇である。天武の皇太子の草壁皇子の妻であった元明や草壁と元明の娘である元正、その二人から天武皇統の重要性を訓諭されていたであろう聖武の、天武天皇に対する尊崇の気持ちは大きかったに違いない。旧都明日香は、天武皇統にとっての原点というべき場所であり、聖武朝の「宮廷歌人」である赤人は、その地を「荒れ果てた旧都」と悲傷して歌うことはできなかったのではないか。第5節で見たように、反歌の「恋」という言葉は人間に対して使われるだけでなく、風景や土地に対して用いられることもある。反歌の「思ひ過ぐべき　恋にあらなくに」は、明日香旧都において天武天皇が統治していた時代を忘れることなく、「恋」し続けるという気持ちを表わしたのではないだろうか。そう表現することが、「宮廷歌人」赤人に求められていたことであった。

〈注〉

1　本稿でいう「宮廷歌人」は、文学史上の呼称として

考えるものであり、白鳳期や奈良時代にそのような官職が実際に存在していたと考えるものではない。

2 清水克彦「蜉老の吉野讃歌」『萬葉論集第二』桜楓社　昭和五十五年

3 太田豊明「山部赤人『神岳作歌』考」『国文学研究』Vol 105　平成三年

4 その名称から考えても、この「神岳」が何らかの神事の舞台であったことは容易に考えられる。少なくとも神亀元年の吉野行幸時というに限定して考えるならば、その際に「神岳」でおこなわれた神事とは、聖武新帝の即位に応じて、たとえば明日香の神霊に対して新帝の加護を願う、といったものだったとも考えられるし、あるいは新帝に神霊を付着させる、といった性格のものだったとも想像できる。そしてそうした明日香での神事の際に、赤人はこの「神岳作歌」を詠んだのだろう。

「山部赤人『神岳作歌』考」より引用

5 池原陽斉「山部赤人『登神岳』歌の主題」『女子大國文』第百六十二号　平成三十年

6 高松寿夫「山部赤人『神岳作歌』の方法　王権不在の廃都歌」早稲田大学大学院文学研究科紀要　一九九二年

7 5に同じ

8 森斌「赤人『神岳に登りて作れる歌』の特質」広島女学院大学日本文学8　一九九八年

9 清水克彦「黒人における叙情の性格と景」『万葉論集』桜楓社　一九七五年

10 「国ぼめ」と「土地ぼめ」この二つの語の正確な使い分けはなされていないようであるが、本稿で使用する場合、行幸従駕歌やそれに類する歌では「国ぼめ」とした。

11 3に同じ

12 村山出「赤人の恋―思春歌の成立」奈良前期万葉歌人の研究』翰林書房　平成五年

13 阿蘇瑞枝「羇旅歌の論」『万葉和歌史論考』笠間書院　平成四年

14 小学館『新編日本古典文学全集』、岩波書店『新日本古典文学大系』、新潮社『新潮日本古典集成』、講

談社文庫　中西進編『万葉集全訳注原文付』、角川文庫　伊藤博訳注『新版　万葉集　現代語訳付き』を使用した

15　中西氏は「流れ落ちる吉野川の清らかなさまを見ると、上流の瀬には千鳥がしきりに鳴き、下流の瀬には蛙が妻を呼んで鳴く」と現代語訳している

16　「吉野離宮従駕の歌」『宮廷歌人　車持千年　奈良前期万葉研究』　翰林書房　二〇〇二年

17　「山部赤人論」『セミナー万葉の歌人と作品　第七巻』和泉書院　二〇〇一年

18　3に同じ

19　3に同じ

20　巻二　一五五・二三〇　巻三　三〇一・三二四・四五六・四五八・四八一・四八三　巻四　四九八・五〇九・五一五・六一四・六一九・六四五　巻五　八九七・八九八　巻九　一七八〇・一八〇一・一八〇四・一八〇九・一八一〇　巻十一　二六〇四　巻十二　三二一八　巻十三　三三一四・三三四四　巻十四　三三九〇　巻十五　三六二七・三七三二・三七六八・三七七七　巻十七　四〇〇八　巻十九　四一四八・四二一五　巻二十　四四七九・四四八〇（巻数と歌の番号は、小学館『新編日本古典文学全集万葉集』による。）

21　山科の御陵より退り散くる時に、額田王の作る歌一首

やすみしし　わご大君の　恐きや　御陵仕ふる　山科の　鏡の山に　夜はも　夜のことごと　昼はも　日のことごと　音のみを　泣きつつありてや　ももしきの　大宮人は　行き別れなむ　（2・一五五）

『全集』は、「天智天皇の葬儀が終わり、忌み明けなど然るべき日を待って、退散したのであろう。天皇や皇后、皇族などに代わり、歌を詠む立場にあったと考えられる額田王が、代表して天智天皇に奉った挽歌であろう。」と注記している。

歌の引用は、小学館『新編日本古典文学全集　万葉集』による。

22　『万葉集　全訳注原文付』　講談社文庫　一九八三年

23　『新版　万葉集　現代語訳付き』　角川文庫　平成

二十一年

24 橋本達雄「宮廷歌人の流れ　山部赤人―長屋王との関連」『万葉宮廷歌人の研究』　笠間書院　昭和五十年

25 22に同じ

26 『全集』・『新大系』

27 9に同じ

28 「赤人の〈芸〉―『登神岳』歌の場合」『万葉史の論　山部赤人』　翰林書房　一九九七年

29 『全集』では、神亀元年の行幸が玉津島止まりであるのに、一二一八番にはそれより南の和歌山県海南市の「黒牛の海」、一二二〇番に更に南の日高郡の「湯羅の岬」を詠んだ歌があることから、この作歌時期に疑問を呈している

30 23に同じ

31 『全集』の「人名一覧」では「渡来人、僧侶、学者の漢風の名など、諸説ある。」と解説する。

32 28に同じ

この論文中の万葉歌はすべて小学館『新編日本古典文学全集②　萬葉集』の読み下し文を使用した。